校友時報

平成5年7月21日
編集人兼発行人
秋田県能代市高塙2番1号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所　㈱大勝堂印刷

〝見せる〟ものの充実を

第34回能高祭をふり返って

盛り上がっているかー。オーッ。
ステージ演奏に興奮気味の顔々。

日常活動を活発に

今年の能高祭は六月二十六・七日の両日開催された。ホームルームデコや各部の展示などに新企画が出た反面、今後に残された問題もありそうだ。各方面の声を集めてみた。

文化的な新企画 完成度は今一つ

「文化的なイベントを」という生徒会総会での生徒会長の呼びかけは、昨年度から特に強く押し出されているが、それが実現されていると見られるものとしては、INCによる「日本文化と欧米文化」、科学部、書道部、写真部の展示、ホームルームデコの一C「万里の長城」、一B「水族館」、壁新聞やゴミ箱コンクールなどがあげられている。いずれも完成度が高いとは言えず、着眼はいいが力不足。

この点で職員による「先生方の知られざる世界」は、収集品でも作品でもじっくり取り組んだ見ごたえのある展示で、来場者の目をひいた。

文化的企画の乏しさについては例年問題になるが、なかなか改善されない原因には、能高祭を目ざした各部の年間活動の積み重ねがないことがあげられる。いつもは地味な文化部の活動の成果を能高祭で公表するという計画性を持つことが望まれる。科学的研究や芸術的作品の「中身で勝負」するようにしたいものだ。

又能高祭全体が商売化、ゲーム化し、来客に何かを「見せる」というねらいが消えていることも問題である。

特別企画「鋼鉄の男」に挑戦

動の中の静。力作ぞろいの書道展。

相互交流の役割果たす

〝見せるもの〟に今一つの充実が期待される反面、生徒たちは結構楽しんで能高祭期間をすごしたようだ。

前夜祭や体育館の催し物は出演者も観客ものびのびと楽しんでいた。お化け屋敷や迷路、わた飴作りなど、準備段階でクラスの連携が深まった点や、学年相互の交流が見られたこと、中でも職員展に掲げられた先生方の写真や思い出の品々、手作りの手芸品などを通して「先生方の意外な面にふれられてよかった」という声は何人からも聞くことができた。

小学校三年生の佐々木まさしくんは「一番おもしろかったのは人間たたき、つまらなかったのはお化け屋敷」と答えてくれたが、地域の幼い子供たちに能代高校への親しみを持たせ知性的な活動に目を開かせることは能高祭のねらいの一つであろう。

こうした面からも、来年度をめざして、能高祭を本校の課外活動の一環として根本からとらえ直してみる必要がありそうだ。

後夜祭の盛り上がりが、能高生全体のものになるような、充実した能高祭を目ざそう。

基本方針の検討を

新聞部で集めた声にも、「生徒は盛り上がっているがお客は小さい子供だけ――これでいいのだろうか」「HRデコはどれも同じようなもので生徒が遊んでいるだけ。もっと工夫がほしい」というものがあった。

この点については、能高祭の企画立案の段階での基本方針の確認と全校生への徹底が必要である。

毎年、前年までの能高祭のやり方を踏襲するのではなく、画期的な企画を生み出したい。

集合に7分かかる 避難訓練 スローモー

五月二十六日に今年の避難訓練が行われた。地震と火災を想定した訓練であったが、生徒の対応はいまひとつ真剣味を欠いていた。

十二時の校内放送によって校外への避難を始めたが、昇降口での測定によると一番はじめに外へ出た生徒の時間は二分五秒。最後の生徒が出たのは四分四十八秒、整列完了が七分十五秒、点呼の報告完了は八分五十六秒後で、全体的にスローモー。

千人にのぼる生徒・職員が全員避難するのに九分近くかかっているということには、避難訓練の必要性の周知徹底、避難方法の現実的な対応への工夫が、職員にも生徒にも求められているということである。特に、階段で一・二・三階の生徒が合流するときの混雑、校外に出てからの駆け足集合などには、改善の余地がありそうだ。

関根先生 アンデスへ 七月末に出発

理科の関根章平先生＝山岳部顧問＝は、今月二十五日に能代を発って、来月はじめに南米エクアドルのアンデス山脈にあるコトパクシ（標高五八九六㍍）とボリビアのワイナ・ポトシ（同六〇九四㍍）の登山に挑戦する。南米の山登りは平成元年冬に続いて二回目。先生気をつけて!!ご成功を祈ります。

北海道で大地震

七月十二日夜、北海道・奥尻島を中心に大きな被害が出た北海道南西沖地震は、十年前の日本海中部地震での大打撃を受けた能代・山本に住む我々にとって、他人事ではないという思いを与えた。

本校生徒会執行部では、七月十四日早速執行部会を開き地震被災地に義援金を送ることを決め、十五日には「生徒会通信号外」として全校生徒にこの趣旨を伝えた。

「十年前には、全国各地からたくさんの義援金を寄せていただいた事でもあります。ぜひご協力を……」と呼びかけ、募金用袋にお金を入れてもらう形式をとった。

生徒会 義援金を集める

能代・山本地区の町村でも、能代市の他八森町、山本町、八竜町、峰浜村などの各地で募金、あるいは援助物資締め切りは二十日となっているが、各クラスとも関心は深く、快く募金に応じていた。

学校に被害なし

十二日夜の地震は、能代周辺でも震度四程度の強い揺れがあったが、学校の校舎その他には特に被害はなかった。しかし翌日十三日から始まった第二回考査には、五能線が止まってしまったため出席できない生徒が出た。

吹奏楽さわやかに 第31回定期演奏会

今月の十二日（土）に能高吹奏楽部第三十一回定期演奏会が千人の聴衆を集めて行われた。今年は例年よりも時期が早かったため、三年生部員を中心に綿密な打ち合わせを何度も行ったそうだ。

第一部は、部員全員が黒い耳と赤いちょうねくたいをつけ、譜面紙まで赤地に白の水玉模様。「星に願いを」「チムチムチェリー」など親しみある曲が会場をディズニー一色にした。

第二部はトランペットの軽快なリズムに始まり第三部は、ドラムを始めとした聞きごたえのあるソロが続いた。第四部では、ザ・シネマパラダイスと題してネバーエンディング・ストーリーなど代表的映画音楽が続いた。

OBからの、ビーチボール・花火・スイカと次々におくられる珍品に会場中がわきあがるという一場面もあり、さわやかな演奏会であった。

ザ・シネマパラダイス。リズミカルな演奏。

最大のイベントである定期演奏会を終えたことについて、吹奏楽部部長の福士浩悦さんはこう語っている。

「今回は曲数が少ない分、選曲に力を入れました。とくにテーマのひとつである『映画』のところでは、それぞれの映画をチェックするのに時間がかかりました。業者の都合などで、楽譜の注文ができずに結局手もちの楽譜を使って穴うめしたところもあります。練習時間が少ないうえに、能高祭の準備や補習が重なり、全員そろって練習するために夜遅くまでかかってしまったこともありました。衣装や譜面紙作りには手を抜いてしまいましたのでその点では、いまいちだと思った人もいると思います。部員数も四十名とやや少なめで苦労しましたが、その分感動もひとしおでした。

来年も成功させてくれることを期待しています。」

この後は吹奏楽コンクール県北大会、全県大会、東北大会、全国大会がひかえている。部員達はすべての大会で金賞をとろうと、意気込んでいる。

涌点 愛すること

▼愛することとは大切に思うことであり、信じることでもある。それは、さまざまな愛の形（友愛・博愛・母性愛・恋愛）によって姿を変える。▼先日「生まれたばかりの赤ちゃんが盗まれた」という事件があった。親であれば子供を思うのは当然のことであり、そこには愛が存在している。犯人にも愛があったから、赤ちゃんは戻って来たのだ。私たちが異性に関心を抱く恋愛に代表されるように、形こそ違うものの、人間は必ず愛を持っているものだ。▼一愛について語ることは無意味なことだ」とよく耳にする。それは、人の心の深さというものは測ることができないからである。しかし人間は、飽くことなく「愛」を語りつづけてきた。愛についての議論をくり返しているというのは、人間にとって「愛」が生きて存在するための究極の目標であり、かけがえのないものだからであろうか。▼しかし私たちは今、もう一度、この愛という言葉の意味を考えなければならない。それは、現代人に「愛」の心が欠けてきているのではないかと思われるからである。若い人々が何を愛しているか、どう愛していたかというようにふり返ってみたとき、その愛の対象が狭められ、浅くなってきているといえないだろうか。いじめや自分勝手な行為、不道徳、地球破壊、政治不信……▼私たちはもっと心を広げて、自分と周囲の人々やものとのつながりを回復したいものだ。愛はそこに生まれるのだ。